

2020年度 コロナ禍における学部生活と学びの変容

奈良 忠寿

新型コロナウイルス感染症の感染防止のため、学部での行動や寮での生活に様々な変化が見られた。最高学部では学生が自治として運営に関わってきたこともあり、環境消毒や感染予防の対策を学生委員会と教職員が共に考え実行した。オンラインで展開した講義でも多くの工夫が見られ、映像によるインターネット上の成果発表という新たな局面が切り開かれた。その一方で、実習・実技を伴う講義やディスカッションを伴う講義では、オンライン講義では代替しきれない点も存在することが意識された。

I. 学部の生活の工夫と変容

1. 三密を回避する工夫

新型コロナウイルス感染症の集団感染防止のために、避けるべきとされた密閉・密集・密接を解消するため、教室環境の見直しを行った。策定された自由学園新型コロナウイルス感染症対策ガイドラインに基づき、窓は常時細く開けるか定期的な換気を行い、座席は1メートルの距離を開けて机を配置するため教室の定員を減らしたうえで、受講生は市松模様に着席し、偶数日・奇数日で指定する位置を変更した。教室には偶数日・奇数日の座席表を掲示し、座席表に対応するように机に赤・青のテープを貼った。これは、机にウィルスが付着し、環境消毒の不備で残存したとしても、日をまたいで同じ机を使用しないことにより感染拡大リスクを軽減させるためである。

集団感染防止の観点から、学生の集まり、教職員の会議もオンラインを多用した。委員選挙や学生への報告も対面ではない形で工夫した。

最高学部生全員をメンバーとするチームをTeams上につくり（Teamsについては後述）、学生への連絡、終業式・始業式・委員選挙・更迭式などで活用した。

委員選挙は、期間内にTeamsのアプリの一つであるFormsを用い、投票・集計を行った。

情報の伝達として、学生はすでに学部生全員やクラスごとの「LINE」を使っていたが、学部教師会としての公式連絡はTeamsを使用した。

2. 感染予防行動意識の向上と委員の関与

学生と講師には毎日の健康記録（体温、咳などの自覚症状の有無）と行動記録（外出先や活動を

共にした者など）をつけてもらい、登校前2週間分の保管を要請した。そして陽性者が出た場合、陽性者に健康記録・行動記録を提出してもらい、濃厚接触者の追跡を行えるようにした。

登校にあたっては、その日の体調報告の提出を義務付けた。学生と最高学部本務教員の知長報告の提出は、スマートフォンアプリ「みんなの体調ノート」を利用した。これにより、提出が容易となり、記録の管理者が複数でもどこでも体調の確認ができるようになった。

対面講義再開にあたり、新型コロナウイルス感染症対策マニュアルを整備し、その確実な実行を学生委員会と共に励行した。

自由学園全体の対策マニュアルでは、環境消毒は次亜塩素酸ナトリウム溶液を薄め、皆がよく触るところを定期的に拭くことになっていたが、最高学部では取り扱いの容易なアルコール液を使用し、扉の把手や座席に噴霧・ふき取りを行うことにした。講義の受講生のなかから責任者をきめ、机や座席の消毒を講義後に行うことにした。備品の点検・補充は委員が行った。これは、日ごろから学生が学部の運営に関わる自治意識を活用したもので、学生委員会を関与させ、使用者である学生が環境消毒を行うことで、他人まかせではなく学生一人一人の感染予防行動の意識向上へとつながることが期待された。

3. 食事体制の変更

密集と接触を避ける工夫が行われた。配膳方式は、不特定多数が配膳することによる感染リスクを避けるため、今までの大皿に盛りつけたものを各テーブルに運び各自で8人分盛り付ける形から、

数人の当番が全学生分を盛り付け、一人ずつワゴンから取る形とした。これに合わせ、食器と献立をワンプレートで盛り付けが可能なものに変えた。盛り付け当番は1年から4年まで全学年が曜日ごとに分担した。

また食事時の飛沫感染と密集・密接を防ぐため、テーブルに1メートルの間隔を開け、並んで二人掛けで着席、全員が一方向を向き黙食を心掛けて食事する形とした。この形では在校生と教職員が一度に食堂で食事をとる座席数が確保できないため、教職員と学生が食堂で一堂に会し昼食時間を共にする形をとりやめ、教職員は教職員の当番が盛り付けた食事を執務場所に運びそこで昼食をとり、学生は食堂にて入れ替え制で食べることにした。後片付けを行う学生は優先的に食べることにし、順番を待つ学生は2階教室で待機し、食事が終わった学生は速やかに退席し、空いた席の番号は、順番待ちの学生へ学部生全員のラインで通知された。

後片付けは、従来通りの体制で、1・2年生が曜日ごとに分担した。

食事後のテーブルは次の使用者のために備え付けたアルコールを噴霧して消毒し、委員会で机配置の変更や消毒液の補充など運営を実施した。



感染対策を行った昼食風景

4. 寮生活

寮では特別運用規定を定め、その規定を理解した上での生活を求めた。具体的には門限や外泊の禁止、寮生以外の寮の立ち入り禁止などである。さらにこれらの注意事項を寮生だけでなく通学生とも共有し、最高学部生全員でお互いの安心・安全のために行動する機運を高めた。

寮でも三密対策のため、窓開けや換気を実施し、手洗いや環境消毒などの感染予防行動の徹底も呼びかけた。生活人数の違いにより、個室対応は寮によって分かれた。

光風寮は現在生活中の人数は定員の半分に満たないため、二人部屋を一人で使用する形で感染リスクを軽減した。感染リスクが高い食事について、朝食は感染対策を徹底した上で、一人の当番が調理し配膳、それぞれが食べるという従来の形を継続した。

しのめ寮は生活人数がほぼ定員と同じで、一人ずつ分けることはできなかった。二人部屋でもパーティションで区切られており、飛沫感染リスクは若干少ないとも考えられた。共用の食事用意場所は使用を中止し、手指消毒用アルコールの設置、寮長による定期的な環境消毒を実施した。

光風寮・しのめ寮生も夕食は学部食堂で食べているが、昼食同様に当番制で個別に盛り付け、黙食を心掛け昼食と同様に二人が並んで食べた。さらに通学生の学部棟利用を17時半までとし、食堂を寮生だけが利用するようにした。

5. 登校に対する配慮と校外学習

対面講義再開に際して、講義時間も変更した。通勤ラッシュを少しでも避けるため、礼拝開始時間を遅らせ、換気や環境消毒の時間を確保するために休み時間を20分とし、講義時間を90分に戻した。

また、感染の不安からオンライン講義継続を当初から選択した学生以外に、当日の体調不良や自主的に登校を遅らせる場合にもオンラインでの授業出席を認めたが、当日朝の講義開始前までに教師室に連絡を義務付けた。これは、講義前に講師にオンライン出席者の有無を伝達するためであり、講師にはそのような事態への対応を対面講義再開にあたり依頼した。

自治区域など、学生が学部運営に関わる点は、感染防止策を徹底したうえで、以前とかわらず継続した。

前期課程修了研究旅行は、宿泊を伴う長期の旅行には感染拡大の不安が大きいため、宿泊を伴わない日帰りの研究旅行として男子・女子合同で実施することにした。公共交通機関を使わず足尾銅

山・日光東照宮などに 12 月 8 日に出かけた。

II. 学部での学びと変容

1. 2020 年度の講義について

2020 年度は、感染拡大防止の観点から科目等聴講生の募集が停止され、国際交流プログラムはすべて中止された。

始業式は 5 月 10 日に延期され、それまではオンライン講義や教材配布による自宅学習による講義開始を想定した準備を行った。

インターネットを利用した遠隔授業は、学生全員に学校としてのメールアドレスや office365 のアカウントをすでに発行していたことを利用して、マイクロソフトの Teams を使用することで準備を進めた。しかし、当時は Zoom の方が機能的に優れていた部分もあり、英語など語学を中心に講師の希望で Zoom を使用することもあったが、その場合も課題や資料配布には Teams 上に講義ごとに作成したチームを使用した。

非常勤講師へのアプリケーションの説明とオンライン講義に関するワークショップを開催し、インターネット環境やパソコン環境が整わない学生には、モバイル Wi-Fi やノートパソコンの貸し出しを行うことにした。

緊急事態宣言が 5 月 25 日に全面解除されることになっても、学期中の変更に伴う混乱を避けるため春期は遠隔講義とし、閉寮と校内の立ち入り制限も継続した。校内の運営に関わる生活経営研究実習の一部では、どうしても実施しなければならない作業を学生に代わり教職員有志が実施した。遠隔講義では、その様子を学生に見せることもあった。

2020 年度秋期は、学習効果の点で優れる対面講義を予定通り再開し、特別運用規定を設けたうえで寮も再開した。ただし、健康上の理由や感染への不安から遠隔講義の継続を希望する学生には、春期に引き続き遠隔講義の継続を認めた。同様に講師でも遠隔での講義を希望する場合は対応した。

2. 講義科目での対応と工夫

講義ごとに、Teams 上にチームを作成し、メンバーとして受講生を登録し、オンライン講義や授業資料配布・課題回収に利用した。講義プリント

の共有の点では Teams は非常に有効だった。

講義形態について、春期はオンライン講義で講師や教職員も自宅からの遠隔講義や勤務を可能にした。秋期は感染症対策を徹底したうえで学習効果の優れる対面講義を実施したが、感染不安から遠隔講義を希望する講師・学生は春期同様に遠隔での講義を継続した。このため講義によっては、遠隔講義継続を希望する学生と対面講義の学生が混在するため、教室で遠隔・対面のハイブリッド形式の講義が展開することとなった。その対応として、各教室にノートパソコンとウェブカメラ、プロジェクターを配置し、一部教室には天吊り式のスクリーンとプロジェクターを設置した。ノートパソコンとウェブカメラは必要台数を新規購入した。



机を減らし間隔をとった教室



配信と対面が混在したハイブリッド型講義

学生が登校しており、講師が遠隔講義を行う場合は、教室に設置されたスクリーンに映像を流した。その場合、もっとも困難があったのは教室と

講師のやり取りである。教室の音をウェブカメラのマイクで拾うのだが、教室の後ろに座った学生の声はマイクで拾えない、反響してしまって聞き取れないことが多かった。この場合、カメラの前に出て発言するなど工夫をした。また、ディスカッションでよくあることだが、教室の複数の学生が同時に発言した場合も、遠隔で聞いている講師・学生は聞き取ることができない。オンラインだけでディスカッションする時と同様に、発言者を一人ずつ指名したり、チャット機能を活用したりした。

最高学部では、オンデマンド型ではなくオンラインで配信される講義を主に展開したが、インターネット環境の不具合で、講義に参加できなくなる学生もいることが予想された。このため、講義を録画し、あとから視聴を可能にすることも行った。これは、チャットによる発言とともに講義での発言や講義内容をあとからじっくり振り返ることを可能にする。あらたな学びの形を予感させた。

3. 研究・実習・実技科目での対応

[生活経営研究実習]

生活経営研究実習は、学園運営の一端を担うという現場を持った実習であることから、元来オンライン授業という形態にはなじみにくい。

しかし、2020年春期はオンライン授業による実習を行うことを余儀なくされ、各グループが工夫をしながら実習を行った。

具体的な内容は、各グループで様々だが、オンライン講義の手法としての工夫は、次の三通りに大別される。これは美術でも同様の取り組みの工夫を行っている。

- ・教材を自宅に送って・或いは自宅で教材を調達し、各自実習（作業）をして共有する
- ・自宅周辺での学習（植物の観察、関連施設の見学など）を行い、共有する
- ・実習を行う上で必要な知識を座学（講義形式）や、調べ学習の発表として共有する

それぞれの実習のなかで、自宅だからできること、新型コロナ感染拡大の状況下だからこそ意味があることを工夫しているが、その中でも特に図書・記録資料グループを取り上げる。

今回の新型コロナ感染拡大に対する自由学園

の対応は、貴重な歴史資料としてそれ自体が記録資料として残されるべき性質をもつ。そのため実習として学園内の各部署に対応を問い合わせ、調査や資料の収集を行った。事態を生きた教材として使用した工夫と言える。各グループ活動については今号に掲載されている、今年度活動の要旨・報告会の要旨も参考にされたい。

[美術]

美術も生活経営研究実習と同様の工夫を行っている。しかし、作品制作が主となる講義であり、教材を自宅に郵送し自宅での作品作りを進めたものの、自宅学習では講師による作品への直接的指導ができない、学校にある施設を使用できず大きな作品作りができないなど困難が大きかった。さらに、緊急事態宣言下では美術館も休館となり優れた作品を見学するという学びの機会も失われた。そのなかで、2020年度は美術展開催の予定であり、新たな工夫としてウェブ美術展を開催した。この取り組みの詳細は、今号の美術展報告を参照していただきたい。

[音楽]

音楽も、オンライン講義を試みたが、個人レッスンはともかくとして合唱・合奏は音がずれてしまい不可能であった。

コーラスでは、作成した画像と課題をアップし、ほぼ毎回課題に沿ってグループフォームにて返信してもらう方法で対応した。7、8月は授業の半分の時間を使ってzoomにて合唱の音取りも6回ほど実施した。

また、コーラスでは合唱だけでなく、2019年度から舞台芸術の創作活動にも取り組んでいた。観劇と自分たちの舞台発表はできなかったが、履修した1年生は聖書を自分たちで解釈し、脚本執筆と演出・出演し、映像作品として編集、YouTubeの限定公開を配信するという講義展開とした。

コーラス・オーケストラの練習成果発表の場であるクリスマス音楽会でも感染防止の工夫がとられた。合唱は感染リスクが高いと考えられたことから事前録画をYouTubeの限定公開を配信する形とし、楽器演奏については記念講堂での生演奏とした。聴衆も分散する形とし、記念講堂では事前録画をスクリーンに映したのちに生演奏を聴き、各教室では事前録画の映像と、生中継された映像

を視聴する形となった。

[体操]

不要不急の外出を控える中で、運動量が不足し健康面・精神面への悪影響が心配された。このため、自宅で簡単にできる体操の動画を作成し、学生が視聴し実行できるようにした。

講義としての体操も、オンラインで実施した。指導者の動きをリアルタイムで映し、自室で同様の動きを行う。また、毎年実施しているチームによる創作体操の発表課題は、チーム学生が考え、一人ひとり撮影した動画をチームで編集し、動画作品として講義内で発表しあう形に工夫した。

Ⅲ. オンライン講義に対する評価

新型コロナウイルス感染症の集団感染防止のために、Teams を利用したオンライン講義やオンデマンド配信・課題による学習の点で多くの工夫を行った。同時に学生や教職員の集まりも、オンラインを多用した。

連絡や情報共有に関しては、インターネットを活用した工夫によって効率化され、学生・教職員に評価された点も多く、デメリットとされた点は少ない。これまで学部棟の掲示板のみに掲示され、確認がしにくかった情報も、すべて Teams 上で一括管理されるため、スマートフォンなどのデバイスでいつでもどこでも容易に確認できることは、学生にとって大きな利点であろう。

その一方で、オンライン講義の評価は、それが学生の成長に与えた影響など長期的に定まていくものと思われるが、短期的な評価として学生から挙げられた長所・短所の主なものは次の通り。

[長所]

- ・自分のペースで受講できる（体調や時間）
- ・録画をすることで復習が容易
- ・資料などの共有が容易
- ・お互いの学びを共有する時間が十分あった

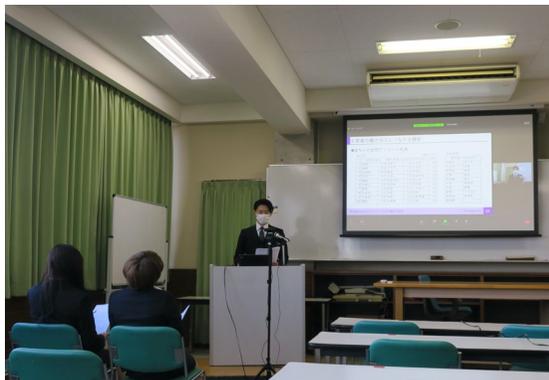
[短所]

- ・各自の Wi-Fi 環境によって受講しにくい場合があること
- ・意思疎通の難しさや、グループ活動ができないこと
- ・画面を見続けることに対する身体への負担

これらの長所・短所は講義科目、実験・実習・実技科目ともに共通する。

オンライン講義は時間的・空間的制約を克服する学びが展開できる利点がある。そして、登校や対人関係に負担を感じていた学生にとって、負担が減り学びやすくなった。特に講義形式の科目では利点が多く、今後の教育にも取り入れる点が多い。

しかし、実験・実習・実技科目では課題が大きい。実技の技術的な伝習は、映像による説明でもある程度可能である。しかし作品への直接指導ができず、従来は伸ばせた才能も伸ばしきれないことが予想される。また、生活経営研究実習の振り返りの中で最大の問題とされたのは、「実習は、実際に実技を通して学ぶことに意味があるので、体験・経験ができないということは大変なデメリットである」ということだ。



オンラインで行った卒業研究報告会

また、学生間の意見交換や、互いに学びの空間を共有することによる意識的・無意識の学び合いに関してもオンライン講義では十分ではない。オンラインではゼミでのディスカッションに、一人ひとり順番に発言するなど工夫が必要であり、ディスカッションが活発にならないことがある。オンライン講義に対して学生へのアンケートでもディスカッションが少なかったという意見がありシステム上の制約も大きい工夫すべき点といえる。

これらの課題は 2020 年度では効果的な工夫をすることはできなかった点であり、秋期に対面講義に踏み切った理由の一つと言える。

さらに、2020年度は対応できず、中止や延期となったカリキュラムもある。学園で実際に生活を共にすることで展開する、生活カリキュラム。移動し現地で実体験することに大きな意味がある学外研修や海外交流プログラム。これらについては、他の優先度が高いと判断された事項の対応を優先したため、オンラインを活用した工夫は、2020年度は行われなかった。

IV. まとめ

2019年度のおわりから2020年度にかけての新型コロナウイルス感染症拡大とその対応は、学校で行われる学習活動やその意味について、学生・教員ともにあらためて考える契機となった。

知識や情報の伝達はオンラインや録画映像の配信でも可能であり、空間的・時間的制約を超えて、優れた講義を視聴することも可能になる。また学生が映像作品として発表する形が増えたことで、学生の新たな力を伸ばしていくきっかけになったといえる。

その一方、オンライン講義では五感で感じることや印象が希薄となる。また、学校で身につくこととしては、知識だけでなく活動を共にすることで育まれる社会性も重要となる。

また、自治区域など「学園キャンパスで実施してこそ意味がある」「学びの中の優先度・緊急対応の必要性が低い」と判断された活動は低調であり、気づかない失われた学びもあるだろう。「このキャンパスで、最高学部段階として、仲間と共に実施してこそ」で得られること、その価値については長期的な評価も必要になる。

環境消毒に委員会を通じて学生を関与させたことは、感染予防行動への意識向上につながった。これは、自由学園がその教育方法として実践してきた自治活動の有効性が示されたといえる。

今回の試行で「便利だ」と感じたことは、今後も積極的に発展させていくことになるだろう。しかし教育として学生の発達を促すため、あえて「不便だ」と感じることを行うこともある。今後も工夫を改めて評価し、新たな学びの形の模索を続けたい。

最後に、2020年度に行われた生活経営研究実習報告会、4年課程卒業研究・2年課程卒業勉強に関

しては別稿が掲載されている。コロナ感染症対策の工夫に触れられている部分があるので合わせてご覧いただきたい。

V. 参考文献

「順調に軌道に乗った遠隔講義」『学園新聞』719号 2020年7月31日発行

「対面授業の再開とコロナ対策」『学園新聞』720号 2020年11月17日発行

「緊急事態宣言再度発令 各部 新たな生活を模索」『学園新聞』722号 2021年3月29日発行